企画展「オリジナリティ誕生！？ 阿方式土器とその変遷」

はじめに

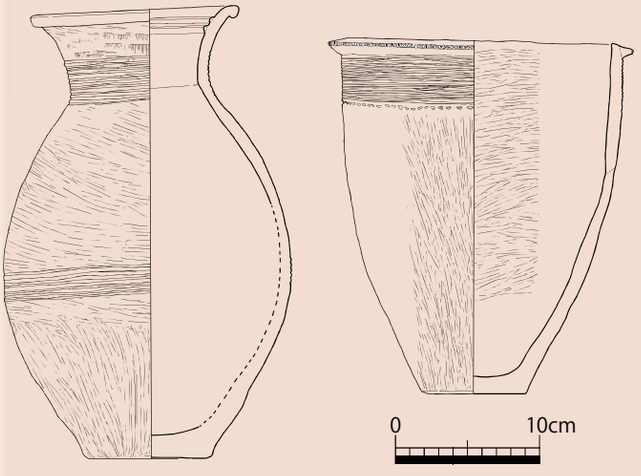
私たちが暮らす今治市は県内でも有数の遺跡数を誇る歴史あふれる地域です。今回の展示では今治市に縁の深い「阿方式土器」とその後の展開（紀元前４世紀後半から紀元前３世紀頃まで）について壺にみられる文様を中心に展示し、考古学的な視点から紹介したいと思います。

本展示で扱う遺跡の位置

阿方式土器って何？

阿方式土器は今から約 2,300 年前（紀元前４世紀後半頃）に瀬戸内海沿岸地域で使用されていた土器の総称です。主に壺（貯蔵具）や甕（煮炊き具）といった器種がみられます。阿方式土器は様々な形を表現した突帯文※1や沈線文※2で飾られ、表面は磨き上げられるなど、装飾性の高さを特徴としています。

「阿方式」という名称の由来は、私たちが住む今治市にある阿方（貝塚）遺跡から出土したことにあります。今治の過去の人々が製作した土器が瀬戸内地域の弥生時代前期末から中期初頭（紀元前４世紀後半頃）という時期の一つのてがかりとなっています。



阿方式土器（阿方遺跡出土）

阿方貝塚史跡公園（今治市）

※1　ひも状にした粘土を貼り付けた文様（貼付突帯文）。阿方式土器では篦などの道具で刻み目が施されることが多い。

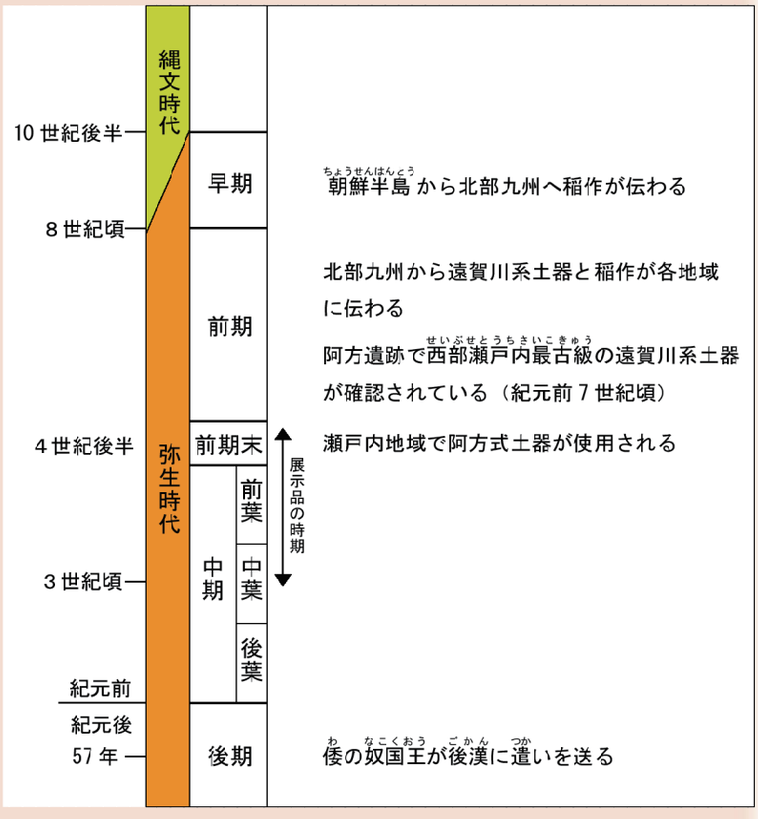
※2　篦や櫛状の道具で土器に描かれた線。阿方式土器では、複数の沈線（多条沈線文）が施されることが多い。

オリジナリティ誕生　遠賀川系土器から阿方式土器へ

阿方式土器より昔の弥生時代前期は北部九州からの水稲農耕の広がりに伴って、西日本一帯で遠賀川系と呼ばれる同じような土器が　使用されていました。遠賀川系土器は装飾性豊かな阿方式土器とは対照的で、シンプルな形にシンプルな文様を特徴としています。

遠賀川系土器イメージ図

展示関連年表



弥生時代前期末から中期初頭になると各地域で遠賀川系土器とは異なったオリジナリティ溢れる土器が製作されるようになります。この時期に瀬戸内地域で誕生したのが装飾性豊かな阿方式土器です。今治平野においては壺のデザインが多様で、壺・甕ともに丁寧に仕上げられています。研究者の中には瀬戸内地域で遠賀川系土器からの変革をけん引したのは、私たちが暮らす今治平野から芸予諸島ではないかと考える人もいます※1。もしかしたら、先人たちが創造力を発揮し、誇大な表現ですが、ある意味で今治が「ファッションリーダー」的な存在だったのかもしれません。

ちょっと補足～阿方式の甕について～

甕は煮炊きに使うため壊れやすく、消費が早い器種です。それにもかかわらず、阿方式土器は表面を磨き上げ、文様で飾られ丁寧に作られています。この特徴から阿方式の甕は「飾る甕」と呼ばれることがあります。愛媛県内で見つかった阿方式の甕は他県のものよりも様々な文様で飾られ、土器の表面を磨き上げる傾向があります。中でも今治のものはどこよりも土器の表面を磨き上げられていることが特徴です。

※1　吉田広　2000 年「瀬戸内地域における遠賀川式土器の解体」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会　1087-1108 頁

阿方式文様とその後

弥生時代前期末から中期中葉（紀元前４世紀後半から紀元前３世紀頃）にかけて瀬戸内地域で作られた壺の口縁部内面には文様帯が見られることがしばしばあります。この文様帯の起源は阿方式土器にあると考えられています。土器を彩った文様は当時の流行であり、文様には当時の人々の好みや考え方が表現されているように思われます。口縁部内面の文様帯がどのように変化したのかを、仮に阿方式土器を１段階として、４段階に分けて紹介します（次ページの図参照）。

文様の種類

①蕨手文
先端を巻き込んだ渦巻状の文様、阿方式では粘土ひもを貼付けて描かれる。

②重圏文
突帯文または沈線文を何重にも巡らせた同心円状の文様。

③斜格子文
複数本の斜線を交差させて描いた格子状の文様。

④複合文
各文様を組み合わせた文様。

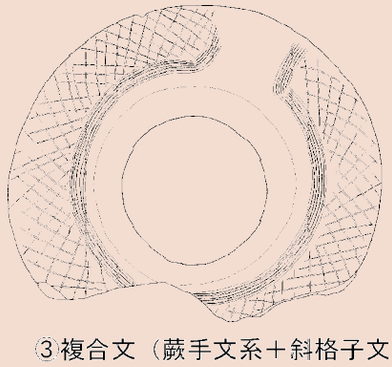
１段階（阿方式）は貼付突帯で描いた立体的な文様（蕨手文・重圏文・複合文）（次ページ土器№.１～４）が大流行する段階です。２段階には斜格子文の流行の兆し（７）がみられ、貼付突帯による蕨手文系の文様と斜格子文を組み合わせたものもみられます（６）。３段階になると貼付突帯文の流行が過ぎ去り、立体感のない斜格子文が一大流行を迎えます（８～11）。４段階になると複合文系（12）、斜格子文系（13）・重圏文系（14）は継続しますが、いずれも装飾性が低下します。以後は口縁部内面の文様帯は完全にみられなくなります。また、この流行の変化のタイミングは東予地域でも一律ではないようです※1。

①蕨手文

②重圏文

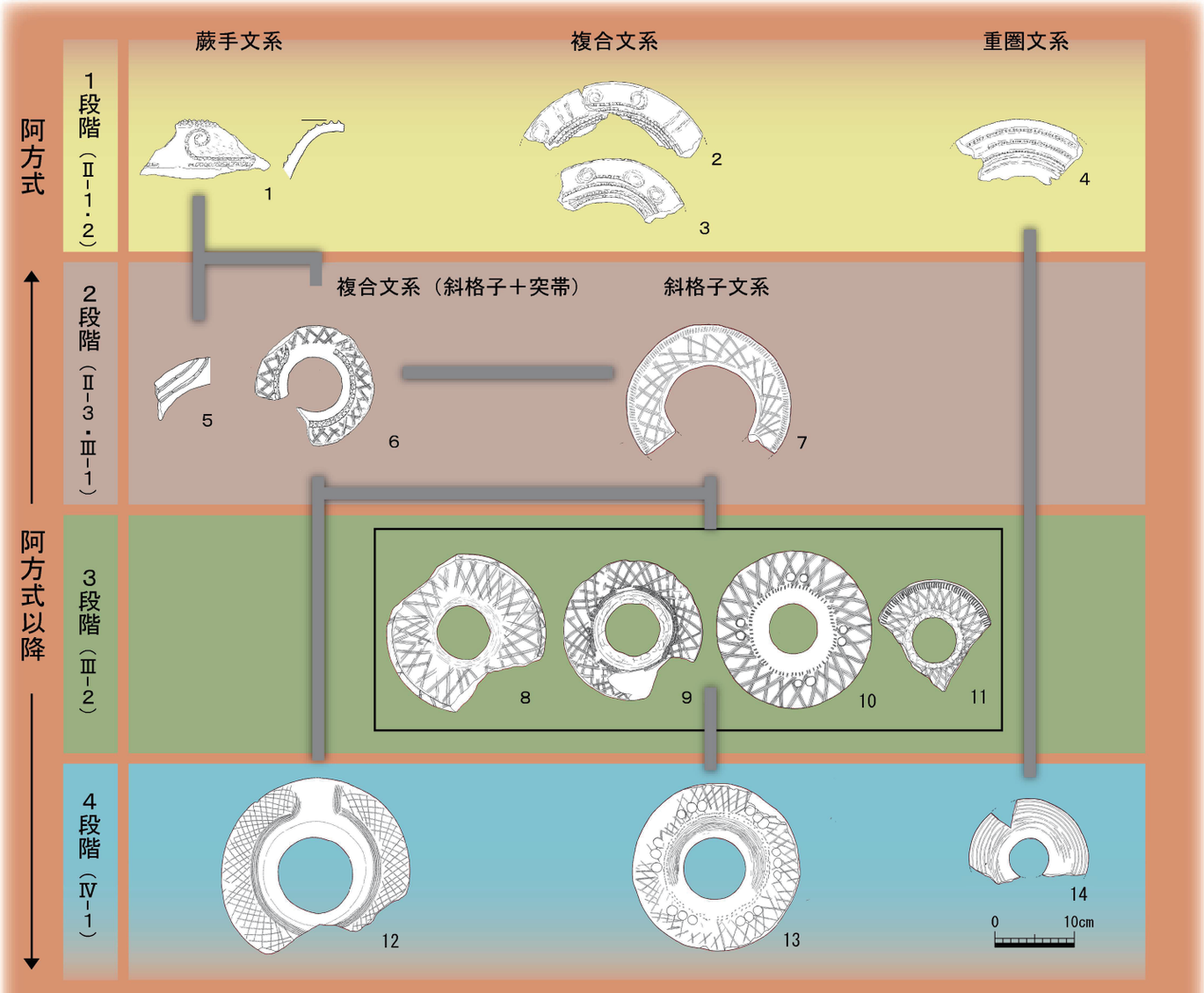
④斜格子文

③複合文（蕨手文＋重圏文）



③複合文（蕨手文系＋斜格子文）

※1　例えば道前平野（西条市）では３・４段階でも貼付突帯文が継続し、斜格子文と貼付突帯文を組み合わせた装飾性豊かな文様で飾ります。また、道前平野では今治平野で口縁部内面文様帯の流行が過ぎ去ってからもしばらく流行が続くようです。



参考文献：柴田昌児　2005「中期弥生土器総論」『久枝遺跡・久枝Ⅱ遺跡・本郷Ⅰ遺跡』愛媛県埋蔵文化財センター

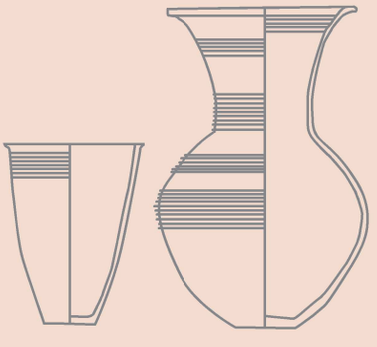
今治平野における壺口縁部内面文様の変遷

「モノ」の変化の見方

例えば７の斜格子文を囲(かこ)む貼付突帯は１のような蕨手文が退化(たいか)して、巻数(まきかず)が省略(しょうりゃく)されたもの、さらに 13 は７の突帯文が沈線文に置(お)き換(か)わったものと考えられます。考古学においてはこのようにある特徴の名残(なごり)などを捉えて、「モノ」の新旧関係(しんきゅうかんけい)を考えます。私たちはこのようなモノにみられるかつての名残を生物学の用語を借りて痕跡器官(こんせききかん)と呼んでいます。

おわりに

今回の展示では瀬戸内のオリジナリティ溢れる土器である阿方式土器について、その文様の変化と継承(けいしょう)を考古学的な「モノ」の見方と合わせて紹介しました。本展示を通して普段は見えない埋蔵文化財(まいぞうぶんかざい)に少しでも関心をもっていただけたなら幸いです。



発行：今治市教育委員会・文化振興課